

表裏一体

齋藤 大陽（福祉学科2023年卒業）

夏風に揺れる木々の緑と耳を塞ぎたくなるほどにうるさい蝉の鳴き声に包まれたこの病院の一室でボクは必死に考えていた。いや、考えざるを得なかった。

春から、幼少期より憧れていた看護師になり、学生時代の恩師の勧めでこの精神科病院に入職した。「精神科では男性ナースは特に重宝される」という先生の言葉を信じてボクは慣れない環境と初めての業務に翻弄されながらもなんとかやっていた。働き始めて3か月、苦手な早起きをして上司に指示されたことをこなすだけで疲労困憊だった。夜は21時になると自然に瞼が閉じてしまい、気がつくと朝になってまた仕事へ向かうそんな毎日。最近ようやく一通りの業務を把握し、自分で動くことが増えてきた。

そんな折、ふと自分が患者の目をよく見ていないことに気がついた。毎日、自分が関わっている患者達のその目がいったいどんな色をしていて、どんな色の光を放っているのか。全然覚えていなかったし思い出せなかった。そのことが無性に気になったボクはすぐさま廊下の一番角の4床病室に向かい、窓際のベッドに横たわる1人の患者の目の前に立った。

やや背もたれが上げられたベッドに仰向けで横たわる患者の顔がボクの視界に入った。幻聴が聴こえ苦しんでいるのだろうか、か弱いうめき声をあげながら、何も入っていないはずの口をまるで何かを咀嚼しているかのように動かし、そして薄く開いたその目は宙を仰いで視点は定まっていなかった。瞳の色は暗く、その輪郭は青白い色をしていた。その目には1粒の光も無かった。この事実を知った瞬間、ふとボクの中にある1つの思いが生まれた。それはボクの意味に関係無く湧水のようにずっと下の方から湧き上がってくるものだった。胸の鼓動が早まった。全身が熱くなり、昔から何か恐ろしいものが目の前に現れた時にどこからともなくジワジワと溢れ出てくるあの嫌な汗の感じを背中に覚えた。ボクの中に浮かんだ1つの思い、その疑問が、ボクをそうさせていることに気づくまでそれほど長くはかからなかった。

自分が考えてはいけないことを考えてしまっているようでとても怖かった。誰かの命に価値を求めている自分が恐ろしくなった。命は等しく平等に尊い。ボクはそう信じてきたはずなのに。

患者を目の前にしてボクはあの事件を思い出した。10年前、とある場所で起きた凄惨な事件。施設で暮らす何十人もの障害者が、ある1人の男の手により無残にも殺されたあの事件。犯人の男は警察の取り調べでこう語ったらしい。「彼らを生かしておくのは税金の無駄だ。彼らが生きている意味がわからない。生産性の無い奴らはいない方が皆んなのためになる。」

彼は事件の5ヶ月後から複数回に渡り執り行われた裁判で死刑になった。あるまじき差別的な考えとそれを行動に移した罪は計り知れなく大きく、断じて容認されるものではないとされた。でもボクは知っている。戦後最悪の殺人鬼である彼の考えと犯行に賛同する声が少なからず上がったことを。「よくやった。」「犯人の言いたいこと、ワタシはよく分かる。」「賛成。」いつも使うSNSでこうした意見をいくつも見た。“心無いことを思う人がいるものだな、どんな人の命もみんな大事な命なのに”そう自分の脳に植えつけられたよく考えれば根拠も無い偽善をひとしきり堪能した後、その時のボクはSNSを閉じた。

再び目の前の患者に意識を向ける。一定のリズムで上下に微動する掛け布団の様子、その患者の呼吸していることをボクに教えてくれる。そしてその患者が生きていることに安心する。たった1つ、その事実だけで十分だとそう自分に言い聞かせる。これ以上余計なことを考えるのはよそう。ボクは病室を出てナースステーションに残る仕事に戻った。

目を開けるとそこはいつもの天井とはまるで違うものだった。色も高さも全然違う。ここはどこだろう。ただ聞こえてくるのは心拍数を教えるモニターの音。誰に付いているモニターだろう。さっきまで聞こえていたはずの蝉の鳴き声はうっすらとしか聞こえない。身体が動かず、なぜか足先や指先に感覚がない。首を横に向けることさえままならない。意識ははっきりしているのにどうしてか身体だけが言うことをきいてくれない。まさかボクは倒れてしまったのだろうか。最後の記憶はナースステーションの椅子に座って看護記録を書いていた記憶だ。それ以降のことが全く思い出せない。自分が置かれている状況への理解が追いつかず混乱している最中、モニターの音に紛れ、遠い所から自分のいる所へと近づいてくる足音が聞こえた。徐々に大きくなるその足音の方向へ、眼球を下の方に目一杯寄せて視線を送る。数秒後、ボクの目の前に現れたのは自分と同じくらいの歳の女性ナースだ。何も手に持たずボクのことを眺めている。何をずっとつつ立っているんだろう。早くボクの状態を教えて欲しい。何が起こって今ボクはここに横たわっているのか。そしてそんな目で見ないで欲しい。険しい顔でボクのことを見つめる者の姿がそこにあった。さっきまでは小さかったはずのひぐらしの鳴き声が妙にうるさく聞こえた。